

## JSPHCS/BMKG 海外研修参加報告書

日本医科大学付属病院 薬剤部  
宮田 広樹

### 1. 43rd American Society of Clinical Oncology (ASCO) Annual Meeting, June 1-5, 2007 McCormick Place Chicago, Illinois

ミシガン湖のほとりにある巨大な会場で、今年の ASCO 年会は行なわれた。参加者は世界中から集まり、3 万人にも及んだと言う事である。この年会の特徴は、それまでの標準療法を改定させるような質の高い臨床試験の結果が多く発表され、その情報を多くの患者に還元する事を目的としている点である。そのため応募演題の中から最も優秀なものが **Plenary Session** や **Oral Abstract Presentation Sessions** で発表され、更に治療上影響の強いものは、翌日会場内で「**ASCO Daily News**」として新聞形式の紙面にて配布される。そして「**ASCO Daily News**」は電子メールでも配布され、このことから、参加者へ最新の情報を届けなければならないという ASCO の使命を強く感じた。また、演題発表の直後に **Discussants** が批判的吟味を行ない評価・解説を行なう形式は、日本の学会では経験した事のない非常に興味深いものであった。さらに最新の情報を届けるだけでなく、**Education Sessions** により新しい研究が行なわれる背景や現在までの治療の変遷などが解説され、ASCO の目的でもある医師やコメディカルに対する教育という面にも力が注がれている事が伺えた。私は最新の情報を収集するため **Plenary Session** と **Oral Abstract Presentation Sessions** を中心に参加したが、近年の傾向である分子標的薬剤を用いた発表が今年も多かったようである。中でも日本からは、非小細胞肺癌に対する 2nd line 治療での gefitinib と docetaxel の比較試験の結果が発表された。**Primary Endpoint** である生存期間における docetaxel に対する

gefitinib の非劣勢は統計学的に認められなかったが、今後 EGFR mutation positive 群に対する研究結果が発表されれば、テーラーメイド治療の 1 つとして十分活用できる可能性があると考えられた。また薬物療法以外にも、進展型小細胞肺癌における全脳照射の有効性を報告した演題があり、日本のガイドラインを改定しなければならないほど強い Evidence であると考えられた。

## 2. Clinical Exchange Program at The University of Texas M.D. Anderson Cancer Center, Jun 6-8, 2007

「Making Cancer History」をスローガンに掲げる全米 1 位のがん専門病院 The University of Texas M.D. Anderson Cancer Center での研修は、大変意義深いものであった。世界からがんを撲滅する事を自らの Mission とし、その遂行のために各職種が専門性をもって治療やケアに当たっている事を肌で感じ、集学的医療の最前線を目の当たりにする事がこの 3 日間で出来た。Program に含まれている講義も集学的医療を考慮してか、緩和医療、サポータティブケア、がん看護、代替医療、ソーシャルワークなど非常に多岐に渡っていた。薬剤部門では、400 名を超える圧倒的な人員と機械化された合理性に圧倒される面はあったが、Pharm. D.が行なう薬学的アプローチは我々が行なうそれと決して大きな相違はないと確信できた。しかし Clinical Pharmacist としての高い資質には感動し、一部の処方権が与えられていることを例にとっても、他職種からもその資質を認められている事が分かった。だが、これら特権は決して他から与えられたものではなく、彼ら自身が大変な努力を重ねてきた結果であると考えられる。

日本も薬学 6 年制や専門薬剤師制度が始まり、制度面ではアメリカの薬剤師に近づいた。今後、私は今回の経験を日本の薬剤師の資質向上のために少しでも還元できればと考える。

最後に、今回このような貴重な機会を与えていただいた日本医療薬学会をはじめ関係者の方々、専門薬剤師育成委員会委員長・大石了三先生、共に研修に参加した橋田亨先生、緒方憲太郎先生、岩下佳敬先生、大変お世話になった M.D. Anderson Cancer Center のスタッフの皆様、渡航期間中にご協力をいただきました部長を初めとする薬剤部職員の皆様、そして何よりも日本からの研修生を温かく迎えてくれた患者の皆様に深く感謝申し上げます。